スーザン・P・マターン著（澤井直訳）『ガレノス――西洋医学を支配したローマ帝国の医師』

増永理考

西洋における医学の伝統を語る上で、本書の主人公であるガレノスはあまりに有名である。しかしながら、彼がどのような人物であり、どのような世界に生きていたのか、あるいは、どのような背景のもと、後代にまで多大な影響を及ぼした医学の基礎を築きあげたかについてはさほど知られてはいないだろう。このような関心に応えるのがまさに本書である。ジョージア大学歴史学部教授である著者のS・P・マターンは、主に医学に着目した歴史学研究をこれまで行ってきており、とりわけ本書では、ガレノスを医学そのものというよりも、むしろ、彼が生きた二～三世紀のローマ帝国社会に位置づけながら、一知識人としての彼の生涯に迫ることを試みる。以下では、まず大まかに本書の内容を紹介した後、評を加えていくこととする。

「序章　腐ったチーズ」は、章題の通り、ガレノスが持てあましていた腐ったチーズを、たまたま訪ねて来た痛風患者に膏薬として用いたところ治療に成功したという、現代人にとっては目を見張るエピソードによって幕を開ける。この挿話が意味するのは、ガレノスが医学的特殊能力を有していたというよりは、むしろ、彼自身が手ずから日常的に診療行為に従事していた点である。著者が描こうとしているのは、前近代における医学の「パラダイム」ともなった人物であるとともに、前述の挿話が示すように、「普通の人々に普通の科学を実践していた普通の人物」であり、その生涯なのである。

そのような「普通の」ガレノスは、小アジア（現在のトルコ）西部のペルガモンにて生まれ育った。「第一章　ペルガモン」では、彼の故郷であるこの都市、そして、同市が属するローマ帝国下のギリシア世界という、ガレノスを形成した背景が論じられる。ヘレニズム時代、アッタロス朝下にあったペルガモンだが、そのときより典型的なギリシア都市の様相を呈し、ローマの支配下に入ってからは、アスクレピオス神殿を中心にいっそうの繁栄をみた。ローマ時代の他のギリシア都市同様、ペルガモンでもその支配層を通じてローマの支配を受容していたが、他方で、アッティカ方言を用いる擬古趣味的な雄弁家の隆盛を意味する「第二次ソフィスト運動」が示すように、ギリシア人知識人のローマに対する関係は複雑なものであった。ガレノスが生きたのは、まさにこのような世界であり、彼自身も都市の一有力者として、また、ソフィストとして「普通の」ギリシア人エリートに位置づけられるのである。

他のギリシア人同様、ガレノスも哲学をはじめとする教育を受け、自身の「パイデイア」を洗練させていった。そのような中、彼は医学と出会った。「第二章　医学の習得」は、彼が医学の素養を身に付ける過程を追う。十六歳より医学学習をペルガモンで開始した彼は、多様な学派の医師のもと、折衷主義的に学びを進

め、父の死後は、スミュルナやコリントスに赴き、最終的にアレクサンドリアへと遊学した。彼の学びの特色は、ヒポクラテス以来の医学的学識への精通もさることながら、教師たちと議論をしながら、絶えず臨床的医学の実践を重視していた点にある。この点で、解剖学で名高く、特に古代においてタブー視されていた人体の死体解剖が行われていたアレクサンドリアは格好の学びの場であり、当地での経験は、ガレノス自身に多大な影響を与えた。

アレクサンドリアで学んだ後、ガレノスは再び故郷ペルガモンへと戻り、そこで都市の神官より剣闘士の治療に当たる医師に任命された。「第三章　剣闘士」がスポットを当てるのはこの時代のガレノスである。イタリア半島に端を発する剣闘士競技だが、帝国東方のギリシア世界でも盛んに開催され、ペルガモンもその例に漏れなかった。剣闘士競技は、よく知られているように、ときに剣闘士の死を伴う血なまぐさい見世物であった。それゆえ、必然的にガレノスのような医師が求められた。そこでガレノスは、様々な外傷例を目撃することとなり、彼自身の言によれば、その治療は多くの場合で成功を収めたようである。剣闘士は蔑視されていた身分であったが、ガレノスは彼らに対する批判は述べておらず、それまでの患者同様、哀れみなどの感情を抱くことなく、冷静に出来事を記録し、絶えず治療のための努力を惜しまなかったのである。

数年間、剣闘士付き医師として務めた後、ガレノスは、東地中海世界を歴訪し、貴重な医薬品などを得つつ、最終的にその活動の拠点を都市ローマに移すこととなった（「第四章　ローマ」）。ガレノスの目には、ローマはその都市環境のみならず、社会そのものまでが異質に映ったことだろう。水や穀物の供給という点では優れていたローマ市であったが、人口が過密で、不衛生であったため、病気が蔓延しやすかった。加えて、この都市で医師として身を立てていくには厳しい競争にさらされることとなった。ローマには、ガレノスの友人もいたが、彼自身の性格に起因するところもあり、瀉血の拒否を説くエラシストラトス主義の医師たちをはじめ、敵対者も多かった。そのような中、ローマの有力者との繋がりを有する、同郷のエウデモスなる人物の治療に当たったガレノスは、他の医師たちが彼の病に悲観的な見解を示すのに対して、その卓抜した観察眼によって、見事エウデモスの病を治癒することに成功した。このことは、他の同業者との公然とした対決を招くとともに、ローマ市におけるガレノスの名声を確かなものにしたのであった。

ガレノスがローマにて人々の賞賛を得た要因の一つは、公衆の面前で競争的に自らの技量を示したことにある。かかる側面が「第五章　解剖とボエトゥス」で語られる。ローマでは死体の解剖が見世物として行われ、ガレノスもそれに従事した。これに関心を示したのが、元老院議員にして元執政官のフラウィウス・ボエトゥスであり、彼はガレノスによる解剖「競技」を援助した。彼の後援をもとに、ガレノスは解剖の現場で自らの力量をいかんなく発揮した。それは、あるときは他の解剖学者に自らの正しさを示すためであり、あるときは教育のためであった。ときにボエトゥスの家族も治療したガレノスだが、ローマ滞在の最初の数年、多くの著作を著し、そのほとんどをボエトゥスに献呈している。彼との関係を通して、ガレノスはローマの上流社会に入り込み、

結果的に皇帝との関係を築くまでに至るとともに、その主著である『身体諸部分の用途について』を含む著作が巷間に知れ渡ることとなったのである。

四年間のローマ滞在の後、ガレノスは突如として同市を去る。「第六章　マルクス・アウレリウスと疫病」は、彼の突然のローマ出立から、再びローマに戻り、皇帝に伺候する時期を扱う。彼がローマを去った理由としては、一つにはガレノスの敵対者たちの嫉妬が強まっていたこと、もう一つにはローマの有力者や皇帝に拘束されるのを恐れたことがあるという。ローマを発った後、ガレノスは二年間を故郷ペルガモンで過ごすが、一六八年末、ときの皇帝マルクス・アウレリウスより召喚された。当時、同帝の共治帝ルキウス・ウェルスの東方遠征を機に、帝国中で疫病が蔓延しており、ガレノスが皇帝の召喚に応じて最初に赴いたイタリアのアクイレイアにて直面したのも、その病に罹患した人々であった。この疫病は、ローマ市でも猛威をふるい、ガレノスも同市にて治療にあたった。この時期の彼は、マルクス帝との随行を避けながらも、同帝の子息であるコンモドゥスや一旦ローマに帰還したマルクス帝の健康管理を担いつつ、執筆活動に専念するなど比較的平穏なときを過ごしたようである。

ガレノスは、かねてからそうであったように、たとえ患者が皇帝であっても自ら治療に臨んだ。「第七章　ガレノスと患者たち」はこれまでのように時系列的にガレノスの動向を追うというよりは、彼と彼の著作に現われる多数の患者との関係に迫る。ガレノスは、昼夜を問わず患者を往診し、その際は、患者の病歴も含めて、緻密な診断を行った。そして、ときに治療は、患者を前にして、他の医師集団との競争の中で行われた。とある患者の治療に際し、他の医師たちが診断をする中、ガレノスはその優れた診断技術に基づいて、彼らとは異なる見解を有していた。そして、患者の様態が安定し、自らの治療が功を奏した時点で、ガレノスは他の医師たちの「狂気」や「喧嘩腰な態度」に嫌気がさして一旦治療を停止し、患者がそれゆえに再び発作を起こして昏睡状態に陥ること、治療を再開すると回復することを衆人環視のもとで実演してみせるというきわどい方法を用いてまで、他の医師たちの愚かさ、ならびに自らの正しさを証明しようとしたのであった。また、ガレノスは脈診によって、患者の状態を把握することを得意とし、あるときは患者の「恋の病」を言い当てているし、何より、脈拍の乱れに影響を及ぼす精神疾患についても優れた観察眼を示している。

さて、「第八章　大火」では、近年発見された『苦痛の回避』という著作を中心として、一九二年にローマ市で発生した大火災以降の晩年のガレノスを記す。平和の神殿を中心に発生した火災は、ガレノスが自らの貴重品を保管していた倉庫を破壊してしまった。これを受けて著された『苦痛の回避』によれば、彼が最も嘆いたのは、処方集をはじめとする自らの著作が焼失してしまったことだという。この悲しみに対して、ガレノスは、ギリシア哲学の倫理的原理の考究に打ち込み、『霊魂が受けるダメージを知り、治療することについて』といった著作を執筆した。彼は、ストア主義などを批判しながらも、様々な学派の考えを自由に用いながら、徳の向上のために、感情と行動を統制することを論じた。八十歳を超えるほど長命だったガレノスだが、その最期について

はほとんどわかっていない。

ガレノス以降の医学は、古代世界の終焉と軌を一にして、すっかり停滞してしまった。その後、彼の医学はどのようなかたちで再び注目を浴びたのだろうか。この点が「終章　西と東――ガレノスと二人の信奉者」にて本書の結びとして論じられる。まずは、九世紀にバグダードで活躍したフナイン・イブン・イスハークなる人物が挙げられる。彼は、中東の都市でガレノスの著作を収集し、それをシリア語、アラビア語で新たに翻訳し、ギリシアの科学をアラビア世界にもたらすことに貢献した。他方、西欧世界で重要な人物は、十六世紀に活躍したアンドレアス・ヴェサリウスである。ちょうど、人文主義が医学に活気をもたらしたルネサンス期に医学を学んだ彼は、ガレノスの著作の精読に加えて、ガレノス同様、解剖学に熱心に取り組んだ。ヴェサリウスは、ガレノスの著作のラテン語訳を行い、同時にそれらに改訂を施した『人体の構造（ファブリカ）』を著し、ガレノスの医学を発展的に継承した。このようにガレノスの医学は、解剖学の点で後世に多くの影響を与えたのだが、現在では、ガレノスが実際の治療を医学の本質とした点が最も有意義とされている。それほどまでに、ガレノスは患者に相対して医学に情熱を注ぎこんだのである。

以上が本書の内容である。ガレノスの著作は、非常に数が多く、それらは現存する古典ギリシア語作品全体のおよそ八分の一を占めている。そのためか、近代欧米諸語への翻訳も重要な個別作品に限られている。まして邦訳となると、我々が利用可能なものはさらに数が少なくなるため、ガレノスについて詳しく知るための手段はきわめて限られていたというのがこれまでの状況であった。そのような中で、本書が出版された意義はきわめて大きいだろう。加えて、冒頭でも述べたように、本書は、ガレノスを医学史というよりは、当時の社会全体に位置づけながら論じることを試みるがゆえに、人々がより幅広くガレノスに接する間口を開いたと言える。実際、本書には、ガレノスに類する医者だけでなく、アエリオス・アリスティデスやアフロディシアスのアレクサンドロスをはじめ、医学以外の面で著名な人物もガレノスと関係して登場するなど、医学史を専門としない読者の関心を引く要素が豊富であり、この点で本書の目的は大いに達成されている。以上のような性格を本書が有するため、医学史を専門としない評者が歴史的観点から本書を評することが許されよう。

本書冒頭でも強調されていた通り、ある点でガレノスは「普通の」人物であった。それは、彼がローマ帝国下のギリシア世界に生きたソフィストと呼ばれる知識人層に属するという点である。このように典型的な当時のギリシア文化に根ざし、多くの要素を他のギリシア人エリートと共有するとはいえども、ガレノスは特殊な道を進んだのであった。これらガレノスの一般性、および特殊性については、本書でも随所に散りばめられているため、以下でそれらを改めて整理した上で、そこから浮かび上がる疑問について評者なりの見解を示したい。

一般に、ローマ人の世界では医者は教師同様、その社会的地位は低かった。ローマ世界にてその役割を担ったのは、奴隷、解放奴隷、そして、まさにガレノスのようなギリシア人であった。しかしながら、ガレノスが属したギリシア世界では、医学は自由人が従事する立派な一つの専門分野としての地位を確立していた。

ガレノス自身も、医学と哲学を同列に位置づけていることからも、この価値観を共有していた。このような背景があったからこそ、ガレノスは医学を徹底的に追究できたのであった。

いま一つ、ガレノスの医学の追究に寄与したのは、ギリシア人特有の「アゴーン」、すなわち「競争」の精神である。ギリシア人たちはその昔より、何かにつけて互いに争うことを好んだ。ローマ時代でも、武力による「競争」はなくなったものの、競技祭の数はますます増加するなど、アゴーンの精神は維持、発展していった。医学もこのアゴーンとは無縁ではなく、実際、小アジア西部のエフェソス市では、外科や問答などの部門ごとに競技が実施されているし[1]、ガレノス自身も、本書で語られているように、解剖における示説を見世物、競技として行い、他の医師と争った。このような競争意識は疑いなく、ガレノスの医学にとって糧となった。

以上のように、同時代的な要素を多々共有していたガレノスだが、その中で彼は、他の人々に比べて独自の姿勢を示してもいた。例えば、本書でも言及のあった、コス島出身のC・ステルティニオス・クセノフォンとの比較が有益であろう。彼はガレノスが生まれる約一〇〇年前に、クラウディウス帝の侍医を務めた。ローマ皇帝の侍医という点ではガレノスと共通するクセノフォンであるが、侍医としての役目を終えた後の動向にガレノスとの決定的な相違がみられる。クセノフォンは、コスに戻った後、故郷に対して公共建築物の建設など数々の善行を施している。コスからは、八〇以上のクセノフォンに関する碑文が出土しており[2]、その中で彼は、その「祖国を愛する」姿勢をコスの共同体によって顕彰されている。

確かに、ガレノスは故郷のペルガモンを離れて活動したものの、「老齢になっても故郷のことを話題にし続けた（二〇六頁）」ように、「祖国を愛する」姿勢を絶えず持ち続けていた。しかしながら、現存の史料に基づく限り、ガレノスにとってそれは故郷への善行としては結実しなかったのである。一般に、ギリシア人の都市エリートは、「フィロティミア（名誉心）」なる特質を共有しており、先述のアゴーン精神のもと、多くは競って都市に善行を施すなどして名誉を追い求めていた。ギリシア人にとって、「フィロティミア」と「アゴーン」は切っても切り離せない関係にあった。先ほどのクセノフォンもその例に漏れない。

では一体なぜ、ガレノスの場合、あれほどの競争意識を持ちながら、そして、故郷に対する思いを持ち続けながら、晩年、ペルガモンでの名誉を追求しなかったのであろうか。この点に評者は、一ギリシア人エリートとしてのガレノスの特殊性を見出す。ガレノスは、ギリシア文化の本質ともいえるアゴーン精神、あるいはフィロティミアを共有してはいたものの、それを発揮する領域を医学に限定していたのではないだろうか。その証左として、ガレノスは自身に対するマルクス帝の評価を次のように記している。「ご存知の通り、彼（＝マルクス帝　※評者註）は常々私のことを医師の第一人者だと言っていた（二二六頁）」と。著者によれば、ここでは「第一にして唯一の」という表現が用いられており、これは競技の勝者を讃える碑文でよく見られるという。実際、この表現は競技者のみならず、都市全体の称号としても用いられている。上記の皇帝の言を自らの誇りとして、ガレノスが記してい

たとすれば、この皇帝の評価は彼にとって最高の名誉だったに違いない。すなわち、ガレノスが「第一人者」たるべく目指したのは、まさに医学の領域であり、医師としての名誉であったと考えられるのである。

もしそうだとすれば、ここからは、競争的な名誉心の追求という、古代の本質の一つに他の誰よりもストイックに浸り続けた人物としてのガレノスの像が立ち現われてくる。そして、それを都市以外のものを対象として追い求めたという点で、ガレノスは特殊な生涯を送ったのである。

ガレノスの医学を批判し超えていくには、ガレノスと同等、あるいはそれ以上の競争意識が必要となろう。しかしながら、ガレノス以後は、アゴーンを本質とする古代世界そのものが変化していった。つまり、ガレノスを頂点とする古代医学を生んだ背景そのものが変質、崩壊していったのである。だからこそ、ガレノス以降は医学がふるわなかったのではなかろうか。

ギリシア的な競争を背景とするガレノスの生涯を浮き彫りにする本書であるが、同時に、競争による名誉獲得の裏返しでもある「妬み」のあり様についても明らかにしている。この点もまた本書の魅力であると評者は感じる。ガレノスは自ら当時の競争文化に乗っかったわけだが、それは同時に、他の医師たちの嫉妬を招き、彼自身を悩ませることとなった。とりわけ、碑文史料ばかりを眺めていると、人々が競争的に名誉を求め、互いに切磋琢磨する像が印象づけられるが、そうした名誉の勝負には常に敗者がいたことを我々は忘れてはならない。そしてその敗者は、ときに勝者にとっての脅威となりえたのであった。

緻密な舞台設定や印象的なエピソードの挿入などからも明らかなように、本書は一般向けに著されている。奇しくも、本書の原著が出版される一年前に、V・ブドン＝ミヨによって、より専門的で詳細なガレノスの伝記が出版されている。[③] 本書と併せて読むことで、ガレノス像の奥行きが増すこと必然であろう。

最後になるが、訳文について、一八二頁の七行目より始まる文に不自然な個所が見られた。正しくは、「リヒャルト・ヴァルツァーによって一九四九年に出版された著作に集められ、分析されている。」であろう。

① *I. Ephesos* 1161–1169.

② A. B. Kuhn, “Honouring Senators and Equestrians in the Graeco-Roman East”, in A. Heller and O. M. van Nijf (eds), *The Politics of Honour in the Greek Cities of the Roman Empire*, Leiden, 2017, 331.

③ V. Boudon-Millot, *Galien de Pergame: un médecin grec à Rome*, Paris, 2012. また、L. T. Pearcy, “Review of: S. P. Mattern, *Prince of Medicine: Galen in the Roman World* and V. Boudon-Millot, *Galien de Pergame: un médecin grec à Rome*”, Bryn Mawr Classical Review 2014. 01. 29.（http://bmcr.brynmawr.edu/2014/2014-01-29.html（二〇一八年四月一日最終確認））では、マターンとブドン＝ミヨの各著作が併せて書評されており、こちらも参照されたい。

（四六判　三八四頁　二〇一七年　白水社　四八〇〇円＋税）

（京都大学非常勤講師）